

---

# 過去の清算 天川折姫殺人事件

白駒の池

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過去の清算 天川折姫殺人事件

### 【NNコード】

N1510T

### 【作者名】

白駒の池

### 【あらすじ】

流れ着いた本牧の地で、今をときめく新進気鋭の女流作家から依頼されたのは、失踪した娘の行方を捜すこと。そして、その娘の父親が失踪に絡んでいるらしい…  
消したい過去に苦しんで、身を隠すように作家活動だけにまい進している、『天川折姫』が稀代の悪女に変身する。

# 1 登場

横浜本牧の地に小さな探偵事務所を開いて、そろそろ5年が経とうとしている。俺が地方の刑事を辞め、横浜本牧埠頭に近いこの地で、探偵事務所を開いてからと云うもの、どういうわけか高校生やらなんやらのガキの家出人の相談調査が群を抜いて多い。これで喰つているのだから、文句を言つても仕方が無いが、どうせ探すなら、どんなでもない美人とか、おもいつきり金持ちとか。そんな仕事はないもんか、と、最近思うようになつて來た。

警察官だつた時、惚れた女がいた。荒れた生活をしていた女だつた。そいつをそこから救いあげようとした時、その事が週刊誌の記事になつた。辞めなればならない状況になり、決断した途端、女は姿を消したのだった。その女を探しているうち、赤の他人を探す事が俺の仕事になつた。もう何年もこうして俺は誰かを探し続けている。

「ふあっ…もう朝かよお。」

昨日も親に怒られて家出していた高校生を見つけ出し、親元に無理やり連れ戻した。なんやかんやでここに戻つてこれたのは、深夜2時を回つていた。

ガキの癖にいちいちブーツアレやがつて、拳銃の果てに女子大生のところにもぐりこんで、とんでもねえ、ガキだつたな…

そんな事を思いながら、部屋のカーテンを開けた。窓からは、本牧埠頭が見える。今日もまた寒そうだ。ここのこと、この部屋のソファーが俺のベットだ。本当のねぐらに戻れるのはいつになることやら…。

「やれやれ…」

手帳に目をやる。ああ、今日も人探しの依頼を受けていたんだつたな。俺 高山春馬 39歳 の手帳にはぎつしりと人探しのた

めのアポが書き込まれている。刑事時代の習慣か、とにかくぎっちりだ。

実は今日の依頼人が誰なのか、俺は知らない。俺が知っているのは、俺にこの仕事を持つてきた男が、週文社という雑誌社の編集の仕事をしている、黒田という男だ、と言う事だけだ。俺は一度この黒田と仕事をしたことがある。美味しい酒は飲ませてくれるし、金払いもいいので、こちらからお願ひしたいところだが、今度の仕事はちょっと胡散臭い。何しろ相手が有名人過ぎる。そんな有名人の仕事が俺のところに廻ってくるなんて、何かウラがあるのでどう、と思わざるを得ない。まあ、金になればなんでもいいのだが……。

最初の仕事は、『昔懐かしの芸能人が今どうしているか』、と云つた特集記事で、何人かどうしているかわからない昔のアイドルの近況を調べてくる、と云うものだつた。何人かピックアップされた元アイドル達のうち、何人でもいい、とにかく近況を調べて報告しろ、と云うものだつた。それなりに喰いつなげて、俺にとつては美味しい仕事だつた。

2度目の仕事は、週文社が協賛していた映画の撮影中、ある若手歌手の護衛を頼まれた。とにかく、人気絶頂だつたので、誰に狙われるかわからぬ、何かあつたら困るから、守れ。と云うものだつた。結局護衛中は何も起こらず。後になって、「殺す」という脅迫状が届いていた事がわかつたのだが、何も起こなかつたので、良しとした。

その仕事のあと、しばらく連絡のなかつた黒田から、「会いたい」と携帯の留守電に連絡をもらつたのは、3日ほど前の事だつた。緊急と言われたけれど、こつちは、高校生のケツを追いかけていたので、今日に先延ばしにした。その時に、黒田から、「今回の依頼主は超がつくほどの有名人」と、言われた。ガキばかり追いかけてきたので、なんとなくワクワクした。

その日、黒田がこの事務所に現れたのは約束の11時を少し廻つた

頃だった。

「すいません、駐車場探すのに時間がかかつて…。」

ドアを開けるなり、黒田はそう言った。その黒田の後ろに立っていたのは、仕立ての良さそうな黒のワンピースと質の良いカシミアのコートを羽織った女だった。横浜よりも青山が似合つような女だつた。水商売より、ブティックとか洒落たレストランに居そうない女だ。

「久しぶりですね、元気でした？」

「ああ、それなり。いつも通りだよ。」

俺がそう言って、後ろに立つその女に目をやると、黒田が、「こちらは、天川折姫さん。今回の依頼主…。」

と俺の顔を覗き込んだ。

「天川折姫…？って、作家の、あの天川折姫？」

「そう、女流作家の天川折姫。」

天川折姫は新進気鋭の女流作家である。いわゆる大衆文学を好んで書き、週文社主催の「ミステリーロマン大賞」で金賞を受賞し、賞金1500万を受け取つたのは、つい最近の事である。ここ数年小説は書き続けていたようだが、週文社での大賞受賞前から、さまざまな賞を受賞し、文学界を席巻している。だが、その私生活はすべてベルに包まれていて、メディアへの露出は一切行っていない。もちろん、天川折姫と言うのはペンネームであり、本名、年齢、その他一切明らかにされていない。そのことがより一層、天川折姫が描く世界への欲望をかき立てるのか、出せば売れるどころか、出すのを誰もが待つて居るほどの状態である。

「一切極秘と言う事で、お願ひしますよ。」

黒田はそういうと、一瞬のうちに田つきが鋭くなつた。

「極秘…。ま、探偵はいつでも極秘任務ですよ。」

と言つと、

「守秘義務つてことですよね。」

と、黒田が言った。

「ええ、口は固いですよ。」

と俺が笑うと、黒田も笑った。が、天川折姫の表情は暗かつた。と同時に何かを隠している固さが簡単に読み取れた。

「こちらが、お話をしていた、探偵の高山春馬さん。元刑事さんなん

で、頼りになりますよ。」

そう言つた黒田の様子からも、厄介な仕事を持ち込んで来たのがアリアリと伺える。ま、久しぶりで血が騒がないわけでもない……。

## 2 消えた娘

「娘を探していただきたいのです。」

少しの間をおいて、天川折姫が切りだした。

「娘さん？」

「はい。私の娘です。」

「まさか…家出？」

この時の俺は、とにかく家出調査だけは勘弁してくれといった状態だった。もう、ガキのケツを追いかけるのは勘弁して欲しいくらいの状態だったのだ。この時点での唯一の救いは、「私の娘」と天川折姫が言った事。追いかけるのがガキでも青臭い生意気な野郎じやないつてことくらいだった。

「家出なんてするわけありません。家出する理由がありませんもの。」

「そう言つと、天川折姫ははらりと涙を流したのだった。  
すると、黒田が話し始めた。

「天川先生は、家出は絶対あり得ない、と言つています。」

「いや、申し訳ない。このところ、失踪人捜索がガキの家出ばっかりでうんざりしてたんで。正直またか！って思つちゃうんだよ。」

俺は天川折姫の顔を覗き込んだ。俺を見る目が、「信用してない」と言つたげだ。

「信じる、つて言つ方が無理なんでしょうけどね。捜査するつて、根掘り葉掘りきますしね、調べるうちに、痛いところも何もかも俺が知つてしまつ結果になつてしまつ事もあるんですよ。さつきも話しましたけど、守秘義務で、誰にも話したりはしません。でも、信用できないなら、僕は調べません。いくらでも探偵はいますから。」

俺がそう言つて冷蔵庫から缶コーヒーを3本持つてソファーに戻ると、天川折姫は、

「いえ、こちらにお願いしたい、そう思っています。黒田さんからの紹介ですし。他に頼れる人がいないんです。よろしくお願ひします。」

そう言って、顔色の悪いその女 天川折姫 はそつと頭を下げたのだった。

「天川折姫さん。あなたの本名は？」

「少し間をおいて、

「たかなし 小鳥遊冴子さやこです。」

「で、お嬢さんの名前と歳は？」

「タカナシ 小鳥遊美月ミヅキ、18歳。T大の1年です。」

「タカナシミヅキさん。どんな字を書くんですか？」

「コトリがあそぶ、と書いて、たかなしと読みます。それから、美しい月。」

「ほお、タカナシさんは、珍しいお名前ですね。」

「それが、私にとつては苦痛なのです。」

「苦痛？」

「すぐに誰だかわかつてしましますから…。」

「？」

2人の会話に割つて入るように、黒田が言った。

「天川先生は、「ご家族はもちろん」自身も表舞台に出る事は望んでいないのですよ。今じゃ、文庫本も単行本も、表紙をめぐれば作家の小さな顔写真が表に出ていますが、それも表に出してはいません。もちろん先生の本名も。出ているのは、天川折姫と言つペンネームと出身地だけ。表に出したくない、という先生の意向もありますが、そうすることで、付加価値がついて、ミステリー作家、天川折姫自身がミステリーとなつて、今や、売れっ子。週文社内部にも最初は賛否両論ありましたが、天川折姫は天下人同然。珍しいお名前なので、これも一切シークレット。表には出していないです。」

「なるほど。じゃ、週文社関係者以外では、俺だけが知っているの

かな。天川折姫の本名を。

「そう言つ事になります。」

黒田は小さく頷いた。

「俺はずっと、天川折姫はこの世に実在しない、そう思つていたよ。

「高山さんはそっち派でしたか？」

黒田は笑つた。

「いろいろ言われていたよね、ミステリーロマン大賞の授賞式でさえ、貴方が出てこなかつたから。」

そう言って、俺は天川折姫の方へ視線を送つた。

「こちらとしては、売れてしまえばそれはそれで良しとなりますが、その一方で、天川折姫と云う名前で複数の作家が創作活動をしていふ、とも云われてましてね。確かに、天川先生は次々世の中に作品を送り出してくれるし、創作しているもののジャンルがかなり広い。そう思われても仕方が無いくらいですよ。」

「横道にそれてしまつて、申し訳ない。で、お嬢さんが居なくなつたのはいつ？」

「1月8日の午後です。」

天川折姫は娘の失踪について、ゆっくりと話し始めたのだった。

天川折姫によれば、1月8日の午後、依頼されていた小説の原稿を週文社の担当が取りに来たのが15時頃。編集者が持つてきたアップルパイを娘の美月共々3人で食べ、編集者が帰つて行つたのが16時過ぎ。その後、「今日はお寿司が食べたい」と言いだした美月のために天川折姫が自ら寿司を注文し、その寿司が届いたのが、注文通りの19時。でも、その時にはもう娘は自宅におらず、娘が失踪したのは16時から19時までの3時間の間だという。もう大学生になる娘なので、思春期にありがちな母と娘の衝突や諍いがなかつたとは言わないが、特に厳しくしてきたわけでもなく、家を出て行かなくてはならない理由は思い当たらぬ…と言つ。

「時間は間違いない？」

「ええ。確かよ。」

そういう天川折姫をフォローするように、黒田は言った。

「その日、原稿を取りに言った芝原にも確認しましたよ。あ、芝原というのは、天川・折姫プロジェクトの担当編集者です。いろいろ理由がありますが、天川折姫はシークレットを売りにしているので、担当者も数名専属で動いてます。」

頷きながら、俺は言った。

「お嬢さんの写真は？」

そう言うと、天川折姫は、

「これが、娘の写真です。」

そう言って、3枚の写真をテーブルの上に置いた。

「ほお、これは美しいお嬢さんですね。丁大ということだし、天が二物を与えちまつた、って事だね。」

「冗談はやめてください。」

天川折姫は、細い指で持っていたハンカチを握りしめながら、抗議の瞳を俺に向かた。

「いやあ、冗談を言ったわけではないのですよ。なかなか美しいお嬢さんだと。これだけ美しければ、寄つてくる男だつてたくさんいるでしょう。お嬢さんに恋人は？」

俺は構わず続けた。これだけ美しい娘が消えたのだ。男関係を聞かないわけにはいかない。

「娘には恋人がいます。この写真に隣同士で写っている彼がそうです。」

「写真はテニス部の練習中に撮ったものだという。何人も写るその写真の中で、天川折姫の娘 小鳥遊美月 と恋人は人一倍の笑顔を浮かべている。

「名前は？」

「法学部の長瀬隆さん。」

「連絡とつてみました？」

「ええ。でも、携帯も繋がらなくて。」

「一緒にいる可能性は？」

「わかりません。だつて、連絡が取れないんですもの。でもね、私はうちの娘に対して、連絡もせずにじどりかに行ってしまうような、そんな娘に育ててはいませんよ。今までだつて、何一つ隠しじ」となく娘は育つて来たんです。長瀬君との事だつて、反対なんとしていませんから。」

そう言つと、氣丈に話していた天川折姫の瞳から涙がこぼれおちたのだつた。

「警察へは届けました？」

「届けましたよ。行方が分からなくなつた翌日には、相談を受けて、僕が一緒に行きました。」

と、黒田は言つた。

「所轄はどこ？」

「青山警察ですよ。」

「青山ね……。」

俺の頭に浮かんだのは、やっぱり青山か、という思いだつた。それくらい、青山と云う場所が天川折姫には似合つてゐる。

「わかりました。で、お嬢さんの父上は？」

「…」

答えない天川折姫を、俺は見据えた。

「未成年者が行方不明になつたような場合、恋人が、離れて暮らす親を調べないわけにはいかないのですよ。話してください。」

「あの子に父親は居ません。」

天川折姫は唇を真一文字に結んでいる。頑なにそれを隠そつとしている…。

「何か事情があおりのようだが、そのままにするわけにはいかないのです。話してください。そこでお嬢さんが居るかもしませんよ。」

「

そこにお嬢さんが居るかもしませんよ

そう言つと、天川折姫は、握りしめたハンカチをさらに強い力で握りしめながら、言つたのだった。

「絶対に口外しない、と約束してくださいますね。」

天川折姫が言つた。

「天川先生、良いんですね？」

黒田は何か知つてゐるようだつた。

### 3 消したい男

「あの子の父親がまつとうに生きているとは思えないのです。」  
天川折姫がすべてをシークレットにして執筆活動だけに集中してきたのはどうやら、その父親に原因があるのだということはすぐに察することができた。

「名前は？」

「皆藤 渉。<sup>かいどう わたる</sup>47になるはずです。」

「失礼かもしれないが、知り合ったきっかけや、別れたいきさつをお話いただけますか。」

「皆藤と付き合いがあつたのは、私が25の頃です。2年付き合ひて、離れて、もう20年になります。」

「20年？」

「ええ、20年です。」

「娘がお腹にいるときに別れたのです。もっとも、気がつかなかつたのですけど。妊娠している事に。」

「知つていたら、離れることはなかつた？」

「いえ。別れたはずです。まちがいなく、離れましたわ。」

「その頃、元町にあるピアノバーで私はピアノを弾いていました。昼間は普通に仕事をしていました。仕事仲間となんとなく入った店がピアノバーで、店先でアルバイト募集の張り紙を見つけて。ずっと小さいころからピアノをやっていたので、やってみようかと思つて。会社に内緒でアルバイトしたのです。そして、その店でバーテンをしていた皆藤と知り合いました。」

「なんていう店です？」

「ピアノバー・エンジェル」

「それで？」

「いつの間にか付き合つようになり、皆藤の自宅に行つたりするようになりました。優しいし。時折見せる寂しそうな影の部分も、

当時の私にはとても魅力的に見えたのです。」

「魅力的ねえ」

俺の言つた言葉に、『バカだと言いたいのでしょ、どうせ。』と言つた風に、天川折姫は続けた。

「ほんと、バカでした。自分にはない世界に生きていたのでしょうね、皆藤は。皆藤との世界に憧れてしまつたのですよ。若かつたのかもしれません。」

そこまで言つと、黒田が遙るよう口をはさんだ。

「天川先生。辛いようなら、私から話しますよ。」

「あ、大丈夫よ。私からお話しします。もう、すべて」信頼申し上げるしか私には方法が無いのよ。だから、覚悟をして来ているから、

大丈夫。」

### 覚悟

俺はその時、どれほど覚悟なのかきいてみようじゃないか、と思つたのだつた。

「そのうちに、だんだんと本性を見せ始めたのです。」

「本性?」

「そう、獣の本性です。」

「どんな?」

「相當お金に困つてゐるようでした。ある日、『120万を用立ててくれないか』と言われ、ほつとおけばいいのに、貸しました。」

「120万も貸した……」

「ええ。当時ピアノでアルバイトしていふとは言え、単にOしだつた私にとって120万円は大金でした。貯金半分、サラ金から半分借りて。大バカでした。」

「他にも貸した?」

「ま、2万くらいのお金を何度も。」

「全部でいくらくらい?」

「さあ、数えませんでしたから。」

「なぜ?」

「途中から、なんとなくわかつたからです。」「途中？」

「もつと早くに気が付くべきでした。でも、それくらい、好きだつたと思つてください。本当に好きだつたんです。」「返してもらつた？」

「いえ、そのままです。だつて、どうでも良かつたのですもの。」「どうでも？」「どうでも？」

「お金なんてどうでもいい。早く離れたい……ただ、それだけ。次から次へといろいろ起きるし。」「それで別れた？」

「拳銃だ、クスリだなんだと関わりたくない話が度々出でてくるようになりました。」「拳銃……」

「ええ。」「その話、警察にしました？」

「いえ。」「

「なぜ？警察は20歳の娘が失踪したからと言つてすぐには動きません。事件性が無いと判断するから。男が居ると判断すれば、一緒に行動している、だから事件ではない、って思うわけですよ。もう少ししたら、帰つてくる。つてね。わかるでしょ、適当に楽しんだら帰つてくるから、とりあえず、しばらく様子を見よう、となるわけですよ。実際、家族が警察行つても、適当にあしらわれてしまう。まあ、だからこそ、こつちはガキの失踪人捜索で忙しいわけなんだが。

でもね、可能性として、その父親が、拳銃だ、クスリだとやばいものに手をだしているのなら、すぐに動きますよ。重要犯罪ですからね。わかりますよね。本当に探しにしたいのなら、さつそとその話をするべきでしょ。」「

ふうつと長い息を吐きながら天川折姫は言葉をつづけた。

「拳銃も、クスリも皆藤が私に話をしただけで、それを持っている

ところを見たわけでも、使つていいのを知つてゐるわけでもないのです。警察に言つほどの事ではないのかもしません。でも、関わるのはやめよ、と決心したのです。強い意志をもつて別れました。

「この時の天川折姫の瞳は子供を思い、何田も眠つていない、さつきまでの虚ろな表情とは違つていた。

「拳銃は、関西から貨物に張り付けて運ぶのだと言つていました。

「貨物…」

「ええ、貨物のコンテナにガムテープか何かで貼り付けておくのだと。」

「クスリも同じよつ。」

「耳にしたのはそれだけです。でも、私にはリアルに想像できたのです。皆藤は長距離貨物のドライバーをしていた事もあつたのです。

目を瞑らなくても、皆藤がそのような事をしている様子が、私には本当にリアルに見えたのです。」

「他には？」

「皆藤と一緒に歩いていた時に、ブレーキもかけずに左折しようとしたタクシーがあつたのです。」

「タクシーが？」

「ええ、私が歩を緩めて、立ち止つた時、皆藤に怒鳴られました

「なぜ？」

「当たれ、と言われたんです」

「当たれって、ケガするでしょ」

「あのスピードじゃ死ぬことなんてない。だから当たれと。その代わり…」

「代わりに、俺が金を取つてやる、と言つたのですね」

付き合つた女の命さえ、金に換えようとする男。付き合つてゆくうちに本性を見せ始めた、つてことか。

そこまで云つと、黒田が言つた。

「天川先生は皆藤渉と言つ人物がお嬢さんの失踪に絡んでいるので

はないが、とそれだけを心配しているのです。だから、『元に』いつして……。

「拳銃と、クスリと、20歳の娘の失踪ね。」

俺はこの時、こりやまた厄介な仕事が廻つて来たぞ、と思つたのだった。

「皆藤涉の住所とかわかります？」

俺が訊くと、天川折姫は用意してきたメモを一枚出したのだった。

横浜市中区本牧？ ?

皆藤  
涉

「『りや、近いね。写真はある？』

「写真は別れた頃に全部処分しました。その住所は20年前に住んでいたところの住所です。忘れたかったのに、結局忘れられなくて。

「本牧ね。調べておきますよ。」

俺が『調べておきます』と言つた時、天川折姫の口元が少し緩んだように見えた。あれはいつたい何だったのだらう。その緩みをほほ笑みと思ったのか、隣にいた黒田は言った。

「良かつたですね。天川先生。とにかく、高山さんにお願いして、私もホツとしました。こんなときに何ですが、執筆も頼みますよ。」「黒田さんしたら、またお尻を叩く気ね……。」

「いやだなあ。僕はお尻なんて叩いた事ないでしょ。天川先生は、いつも期限通りだし。締め切りに遅れたことなんて一度もない。編集者にとっちゃや、何よりもありがたい先生ですよ。」「ほお、筆が早いのですか？」

と、言つと黒田が言つた。

「いや、早いのなんのって。最近の先生は皆さん、ワープロお使いですが、天川先生は完璧なブラインドタッチだし。いや、見ていて惚れ惚れしますよ。とにかく、早い。」

「じゃあ、とにかく早く解決させて、次の作品を楽しみにしているファンに答えるなければならないのが俺の仕事ってことだ。」

「そうですよ、頼みますよ。高山さん。」

「じゃ、天川さんを駐車場まで送ります。そしたらもう一度戻つてきますので。」

そう言つと、黒田はドアを開け、天川折姫をエスコートするかのようにドアの向こうに消えて行つた。

「さてと、どうするかな…。」

娘の恋人からあたるか、母親の昔の男からあたるか…。それとも…。

そんな事をいろいろ考えているうち、どれくらい経つただろうか、

黒田が事務所に戻ってきた。

「いやあ、突然天川折姫を連れて来てしまって、すいません。」

黒田はそう言つた。

「しかし、この辺りは小さい駐車場が多くつて。天川折姫はマセラッティに乗っているんですけどね。なかなか入れやすいとこなくて大変でしたよ。」

「ああ、パーキングも無くなつて、更地になつて、結局そのままのところが多いのさ。不況つてことなんだろうね。」

「すいませんね。失踪人捜索ばかりで。」

「いや、久しぶりに血が騒いだよ。とにかく、ガキ、しかもチーマーだのなんだの、野郎ばかりなんだ。」

「それにくらべりや、天川折姫は良い女でしよう。さつき、高山さんは、娘の事を『天が二物を与えたまつた』って言いましたけど、天川折姫もまさにソレですよ。同じくらいの歳の作家は沢山いますけどね。本当の意味で、テレビに映したいのは天川折姫でしょう。品もあるし。」

「でも、本人が出たがらないんだろう。」

「ええ。どんなに説得してもだめ。」

「理由は？」

「え、理由？」

「そつ。理由」

「僕は純粹に昔の男に関わりたくないだけだと思いますけど。露出が増えれば当然、娘の父親の田に留まることがあるでしょ？…。」「それだけ？」

「え？」

「他には？」

「いや、それしか聞いていませんよ。もともと、天川先生は週文社の専属になる前から、ペンネームでいろいろ執筆していたようですが、今のようにサスペンスを主流にしていたわけじゃないんですね。言つてみれば、「社会派」ってやつです。その時折、世間を賑わすような、たとえば、「保育園の待機児童問題」「偽装請負」「早期退職」そんな社会面の記事のキーワードになるようなものをテーマにいろいろ書いていたんです。それが、うちに募集した『ミステリーロマン大賞』からは、そのキーワードにさらにミステリーカラーを鮮明にプラスしてブレイクした。以前の作品よりパワーアップして、読者に受け入れられましたけど、それからも一切テレビには出たがらない。

『私は描き手だから』<sup>かきて</sup>と言つのですよ。文字を書くの「書き手」「じやなくて、自分が読者に届けるための鮮明なビジュアル、映像を映し出す「描き手」だと。描いている私が表に立つ必要はないのだと言つて、結局今のスタイルに落ち着いています。』

「それほど、その昔の男、えっと、皆藤渉つてやつとは関わりたくない、つてことなんだろうか。」

「でしょうね。金づるにされたくないのでしょ。週文社としても、安心して執筆して欲しいので、そのあたりは全面的にフォローするつもりですし。今だって、ずいぶん気を使つてますよ。」「仮にだけど。」「

「なんです？」

「週文社関係者から、天川折姫の素性がその、皆藤涉に洩れている可能性は？」

「え、高山さん。勘弁してくださいよ。」

「だつてよ、週文社しか知らないなら、そこから伝わったとしか思えないだろう。さつきの感じじや、天川折姫は、娘を連れだしたのは、皆藤だつて思つている感じだつたし。」

「あり得ないと信じたいですが。もしうちからだつて言つのなら、知つているのは、私と、娘が失踪した日に原稿を取りに行つた芝原。あとは、編集長の今野。あとは、重役連中つてとこですね。」

「そう。ま、調べさせてもうひらひらみ。そのうちなんかわかるだろうし。」

「良かつたですよ。そう言つてもうれえ。経費関連はいつかのよう  
に1カ月でまとめて請求してください。えつと、着手金は50。娘  
の居所を突き止めて連れ戻した時点での成功報酬で250です。」

「おい、からかつてるのか？」

何しろ、ガキを追いかけているのとはケタが1つ多かった。から  
かつてゐるのか、と言つたあとで、そうか、天川折姫が俺に頼みた  
いのは、『娘の失踪』じゃなくて、『皆藤涉』の方なんだろうな、  
と思つた。拳銃とクスリだものな。

「やばいことに関わつてゐるかもしれません。何かまずい事が起き  
たら、即、警察に届けていただいて、高山さんは手を引いてください。  
それでも、成功報酬の半額は支払いますよ。」

「週文社が？」

「天川折姫が。ですよ。窓口は僕なんで、何かあつたら連絡ください。次の締め切りが迫つてるので、天川折姫は静かにさせてやつてください。」

「わかつた。」

「で、他に何かありますか？」

「娘だけど。」

「？」

「いや、いい。調べりゃわかるだろうから。何かあつたら連絡するよ。そうそう、天川折姫のマセラッティは何色だい？」

「濃紺のガブリオレですよ、それが何か？」

「いや。ずいぶん派手な車に乗ってるんだな。と思つてね。」

「天川折姫ですからね。カローラじゃ話にならないじゃないですか。じゃ、着手金は今日中に天川折姫本人が振り込みますから。以前の口座で良いですか？」

「ああ。」

「よろしく頼みます。」

#### 4 消したい男の過去

そうひと言つて、黒田は出て行つた。なんでもこの近くに住んでいるフイターのところに原稿の上がり具合を見に行くのだといつ。

「「」苦労さん。」

俺は見送つた。

ひとまず今夜は元町にある、ピアノバー・エンジエルをあたつてみる事にしよう。しかし、天川折姫はまだ何か隠している。見つかリたくない、と言いながら、マセラッティだなんてありえねえ。

15時ジャスト、インターネットから、俺の口座を確認した。黒田の言つていた通り、天川折姫名義で50万円が入金されていた。金のあるところにはあるもんだ。今夜はピアノバーに行くことにじて、その前に、皆藤渉の住所に行つてみることにしよう。

横浜市中区本牧？

皆藤 渉  
かいとう わたる

その住所を地図で調べる。

歩いて行くにはちょっとあるが、同じ本牧だ。散歩がてら行つてみることにした。

「身を隠すほど会いたくなかった男の居場所の近くまで、いくら娘が行方不明だからって派手な車で来るかねえ」

昼間、事務所で話している時も、黒田からマセラッティときいて、天川折姫が理解できなくなつていった。そして、この住所までの道すがら、益々、その疑惑は膨らんだ。天川折姫は何度かここへ通つたと言つていた。俺の事務所がそこへほど近い事くらいわかっていた筈だ。会いたくないのに、見つかるかもしれない危険を冒してやつてきた。

## なぜ

こんな日は、必ずネクタイを締める。その方が、情報を得やすい事を、長年の経験から俺は知っていた。探偵なんて恰好はどうでもいいだろう、なんて思われるのが一番困る。信用されなければ、誰も何も話してはくれないのだから。

その男の住所は、俺の事務所からは歩けば分20の距離だった。だけど、人の流れとは全く逆の、どちらかと言えば、あまり人気のない、そんな場所だ。何棟かの賃貸オフィスビルが並ぶ、建物と大きな駐車場に挟まれるように立っていた。

駐車場と、その家は薄いブルーのフェンスで囲まれていた。おそらく、この駐車場の持ち主がこの家の売主だったのだろう。駐車場と、その家は、小さな扉で繋がっていたが、その扉は針金でぐるぐる巻きにしてあつた。

「皆藤 実」

道路に面した表札にはそう書かれていた。父親だろうか。周りが真新しいマンションや、瀟洒な家が立ち並ぶせいが、その家には「昭和の匂い」がした。2階建てで、バルコニーやベランダと言つよりは、物干しという言葉がぴつたりと当てはまるスペースが、2階の南側にはあつた。すべての窓に雨戸が閉められ、一見して誰も済んではないように思われる。モルタル塗りの外壁はひどくひび割れが入り、あるところはそれが割れて崩れかかっている。駐車場スペースもガランとしていた。

「何か、御用？」

そう言って、俺に声をかけてきたのは、どうやら、斜め前の大きなビルの住人らしい。俺が覗き込むのが気になつて、隣から出てきたようだつた。品のよさそうな、60代くらいのご婦人だつた。

「あ、いえ。」

「まさか、ここを置おうって氣かい？」

「え、あ。そんなところです。」

「ほお、ここをかい？」

「ええ。」

「ま、悪くはないが。あなた、この町の者かい？」

「ええ。5年ほど、本牧にいます。」

「5年か。じゃ、あの事をあなたはしらないんだね。」

「あの」と？

「5年じゃ知らないんだろう。ここに住んでいた家族のこととか。買つて言うなら止めないが、私とは、そこで不動産屋やつててね、こうしてしゃべつちましたんだから、教えてやるよ。まあ、入りな。」

そう言って、そのご婦人は、皆藤渉の実家前にあるビルの1階に入つて行つた。おそらく、皆藤渉の実家もこの不動産屋が管理しているのだろう。中から、若い男が出てきて、

「社長」

とそのご婦人を呼んだ。

「お客様だ。お茶をだして。」

そう言って、応接に腰を掛けた。

「まあ、どうぞ。」

俺は言われるままに腰を掛けた。

「この辺りに小さくてもいいので、田町の好い家を探しています。」

「言つた事は嘘ではない。田舎に置いてきた母親と一緒に住める場所を探していた。今の事務所に住民票をおいて2年。いつかまたもに暮らせる日が来たら、あの事務所とは別に安住の地をここに見つけてやる、と思い続けて、もう2年だ。

「別に隣じやなくてもいいんだろ。」

「そりやそうですが、あのくらいの所なら、安く買えるかな、なんて思っちゃいまして。」

俺は、適当に話をした。

「もう、隣は誰も住んではいないんですか？」

「あたりまえだろ。住める訳がない。」

「……」

「おや、本当に何にも知らないのかい？あのこと。…何があつたか知らないで買つちまつていいのかい？」

「えつ、隣は事故物件か何かですか？」

「まあ、そんなところだね。物件はいくらでもあるから、隣はやめておいた方がいい。」

「そうなんですか……。」

「事故物件といったって、気にしなけりやお買い得なものはたくさんあるさ。殺人、自殺、火事なんていうのは、問題外だらうけど、たとえば、隣に暴力団の事務所があるとか、売主が暴力団とか、最近なんかじや、宗教団体関係も嫌がられるね。」

「そういう問題を抱えてるんですか？」

「近いね。」

「そうでしたか……。で、どんな？」

「隣の息子。」

「？」

「警察に2度も御用になつてね。」

「2度……。」

「そうさ。そのたびに隣の家は世間にテレビや新聞でお披露目さ。新聞にも載るほどの事件を息子が起こしたって事ですか？」

「そうや。だから、おススメはしないぞ。」

「なるほど。」

「どれくらい前の事なんですか？」

「うちの初孫が生まれた頃だから、最初はもう17年も前になるさ。もともと暴走族だ何だと素行の悪い奴だつたけど、あれからここには寄りつきやしないさ。『主人は亡くなつて、奥さんは、元町の方だつたか、呉服屋をやつている実家に戻つたつて聞いたけどねえ。』

「ずっと空き家つてことですか？」

「もともと、あの家はうちの父が住んでいてね。それを売ったのさ、息子のオヤジにね。いろいろあって売りに出して欲しいと言わっていたんだが、とても無理さ。」

「息子は何をしたんですか？」

「あの男、とんでもない、趣味をお持ちだったのさ。」

「趣味？」

「そう、趣味さ。」

「本当に何も知らないのかい？」

「じゃ、特別に教えてやるよ。」

「こちらこちらと目をやって、この婦人は話し始めた。

「おかしくなり始めたのは、20歳くらいの頃じゃなかつたかねえ。身なりが派手になつて、こう、首周りに金のネックレスぶら下げて肩で風を切つているようなそんな感じだつたね。その程度なら、まあ、男子だつたら、誰でもあつても不思議じやないだろう。誰だつて、そのくらいならね。でも、隣のドラ息子はそれじや済まなかつた。サラ金に手を出してね。家にも取り立てが来ていたよ。サラリーマンの親父にずいぶんとお金を出させたみたいだつたさ。だけど、そつこつしているうちに、今度はドラ息子、何を思つたか、そのサラ金で働くようになつたみたいでさ。取り立て屋になつてしまつてね。相当ひどい取り立てをやつたらしくて、借錢していた家族が、一家心中しちまつたのさ。心中には違ひないが、なんて言つたかな、そういうひどい取り立てをしちゃいけない、つて法律にひつかかるような事していたらしいね。相手に暴力振るつたりしたつて事で、逮捕されちまつたんだよ。」

「逮捕？」

「そう、逮捕さ。じいじ調べたのか知らないけど、ある日突然、ワイドショー や何やかやがここに押し掛けてくるようになつてね。」

「親父さんはサラリーマンを続けられなくなつて、家に引きこもつていたんだよ。でもね、当時は社会問題の一つでもあったからか、写真誌がしつこく張り付いていて、顔写真撮られて、「これが取り立

て屋の父親」みたいに雑誌に載つちまつたのさ。そんなショックもあつたんだろうが、心筋梗塞とかであつといつ間に亡くなつちまつてね。」

「そんな事があつたのですか。全く知らなかつたです。」

「驚いたかい。」

「ええ。びつくりしました。」

俺が、オーバーなくらいにびつくりを強調して言つと、その『』婦人は、

「でもねえ、本当にびつくりしたのはその後さ。」

と言つて、もつたいつけて、続きを話し始めた。

「しばらくの間、警察の『』厄介になつていたんだろうけど、親父さんの葬式にも当然ドラ息子は欠席で。いくらも経たないうちにまたドラ息子がさ。」

「また何かした?」

「今度は、幼児ポルノだそうだ。幼児ポルノ。あんたわかるかい?未成年の…ですか?」

実際、俺にはまったく興味のない話だつた。

「そうだよ。でも、未成年どころか、幼稚園くらいのまだまだ、かわいい盛りの子供の裸を撮つてたんだよ。」

「隣で、ですか?」

「そうさ、息子がしばらく出入りしているな、と思つてたらそんな事をやつてたらしい。最近じやようやく、そういうのを取り締まる法律ができたらしいけどね。なんでも、昔のサラ金の取り立ての仲間とやつてたらしいけど、サラ金に金を返せない母親達から、子供を連れてこさせて、写真を撮つてたらしい。警察にも散々聞かれたさ。いい迷惑だつたよ。家の名義は母親にあるらしくて、後になつて鍵を変えたらしいけどね。捕まつた後、テレビのワイドショーなんかでも盛んにこの辺りが放送されちまつてね、ずいぶんとたくさんの写真や雑誌が押収されたって言つてたねえ。」

「それで、隣は2度目のお披露目ですか?」

「他にも叩けば埃ばかり見つかるのだひつみ。眞面目にやつてたときだつてあつたんだけねえ。」

「じゃ、隣は止めた方がいいか。」

「あんたが住むのかい？」

「山の中に母親残しているんで、陽のいっぱいあたる場所で一緒に暮らそうかと…。」

「ほお、親孝行なんだね。協力したいが、隣はやめておきな。いい事ないさ。買うんなら更地になつてからだね。値も下がるだらうから。もつとも、持ち主は売る気が無いようで、とりあえず管理は任せているんだが、中には荷物も残つてゐるから、入つてもらつちや困ると言わせていてね。家の中はそのままだ。雑草が生い茂つて、夏は蚊が増えちまうんで、小さいながらもあの庭だけは、年に2階、うちの駐車場と一緒に植木屋呼んで綺麗にしているがね」

「そうですか。わかりました…」

俺は頭を下げてその場を立ち去つとしたその時、そのご婦人が、「そう言えば、」と、俺を呼び止めた。

「なにか？」

「いや、孫の言つ事だから、よくはわからぬけどねえ。あんた、マセラッティって言う車知つてるかい？」

「ええ、高級外車ですよ。」

「私なんて、走りやいいと思つてゐるからどれがどれだかわからんないけどね、1ヶ月くらい前に、そこんところにマセラッティが停まつてて、隣の様子を窺つていたようだつたつて言つてたよ。また、やばい事にならなきゃいいんだけどね。」

そう言つて、路地に曲がる直前の四つ角を指さした。

「中には綺麗な女が乗つてたらしいけど。まったくねえ…。」

また、マセラッティか…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1510t/>

---

過去の清算 天川折姫殺人事件

2011年5月23日18時25分発行